

今年1月6日、高砂市役所。副市長の富田康雄(60)と高砂市民病院の院長大野徹(60)は、加古川市の幹部から、思ってもいなかった計画を打ち明けられた。

「加古川市民病院と神鋼加古川病院を統合します」

実は昨年8月、高砂市は統合計画への参加を持ちかけられた。「加古川市内に新病院を建て、高砂市民病院は療養型病床中心に」。それが提案の内容だった。

大野は緊急の幹部会を開いた。当時、内科医の不足から急激に経営が悪化していた加古川市民に対し、高砂市民は着実に赤字を減らしていた。幹部会は「とても受け入れられる内容じゃない」との意見が大勢を占め、高砂市は統合に応じなかった。その後、打診はなく、大野らは計画が進んでいないと思っていた。

統合計画は1月12日に記者発表された。7年後をめぐりに600床の大病院が新設されれば、近接する高砂市民病院への影響は計り知

# 再生の処方箋

報告・高砂市民病院

5

## 市民と共に描く将来像



大野徹がけん引する病院再建をめぐり、院長室のドアはいつも開けている。高砂市荒井町紙町

れない。さらに高砂市側を驚かせたのは、発表の会見に県知事や神戸大医学部長が同席したことだ。「広域医療圏も絡んだ構想か」との憶測を呼んだ。

大野は、当初の提案を「住民感情を無視した内容」と批判する一方で、冷静に将来を見据える。個人的意見

経常収支の「V字回復」

### 改革後の姿

を果した高砂市民病院。改革プランで掲げた2011年度での黒字化を、1年前倒しで達成できる可能性もある。だが、大野は「問題はその後」とみている。

「市民の意見を聞く場を設け、院内外で、持続可能な病院経営を議論する必要がある。市民病院の行く末は、地域が何を望むかにかかっている」

10月30日、病院は「健康まつり」を開いた。無料の健康チェックなどに列ができた。入院患者の見舞いに訪れた市内の主婦(64)が、どこか誇らしげに語った。

「利用したいと思える病院になった。こんな病院はほかにない」  
院内の一体感、スタッフの頑張りの積み重ねで組織は活性化された。よき地域病院であり続けられるか、市民とともに将来像を描くのは、これからだ。

敬称略 (増井哲夫) おわり